【ノート】 大学入試研究ジャーナル第 34 号，273-278，2024

共通テストの英語における英語民間試験導入の効果と課題（3）
――みなし満点方式 5 か年の分析――

永田 純一，小俣 岳（広島大学）

2019 年度入試から開始した「みなし満点方式」について，2023 年度入試を含めた実施状況と実際の入試成績（英語の得点）との関係に関する分析結果を報告する。選抜方式及び地域別の申請者数の推移についても示す。英語資格･検定試験と共通テスト及び個別学力検査との間における得点の対応関係を把握した上で，信頼性の高い満点とする基準の検証方法の確立が今後の課題である。

キーワード：英語民間試験，みなし満点方式，大学入学共通テスト，個別試験

1 はじめに

本研究は，大学入学者選抜において英語民間試験（以下，英語資格・検定試験と呼ぶ）の成績を活用する効果と課題について，竹内･永田（2021），永田･三好（2023）の分析結果に引き続き，2023 年度入試結果までを含めた分析結果について報告するものである。

大学入試における英語資格・検定試験の活用に関するこれまでの経緯（文部科学省, 2001; 教育再生実行会議, 2013; 中央教育審議会, 2014; 文部科学省, 2016; 大学入試のあり方に関する検討会議, 2021）については，竹内・永田（2021），永田・三好（2023）の冒頭にまとめられていることから，ここでは詳しくふれないが，大きな出来事としては 2020 年度にその実施が予定されていた「大学入試英語成績提供システム」がある。このシステムの導入において大きな期待が示されたのは，（1）異なる英語資格・検定試験に対して共通の参照基準として CEFR が示されたこと，（2）各受験生に全国で一意となる ID が付与され，その固有の ID によりさまざまな入試データを紐づけることが可能となること，の 2 点であり，極めて大きな変化であった。

まず（1）の異なる英語資格・検定試験に対する共通の参照基準の問題は，文部科学省からこのような参照基準が示されていない場合には，大学間でさまざまな異なる基準が導入されることとなり，受験生に混乱を招く恐れがある。またこの「大学入試英語成績提供システム」導入時における方針としては，CEFR の各レベルと英語資格・検定試験の基準との対応関係について，継続して各試験実施団体が検証を行いつつ参照表の更新を行うこととなっていた。これは各大学で英語資格・検定試験の評価を行い，その対照表を独自に更新するのではなく，全国で統一的に対照表が更新されることから，受験生からみてもわかりやすいものになったのではないだろうか。一方，（2）の受験生固有の ID 付与については，もしこのような ID が付与されていれば，現在，選抜区分ごとに出願受付を行っているが，この ID により固有の受験者を特定することが容易となり，評価する側の大学にとっても，入試実施運営上の効率化，並びに入試ミスの低減化等の効果が期待されるものと思われる。大学入学共通テストの受験番号がその代替とも考えられるが，一般選抜以外の選抜区分において，大学入学共通テストを利用しない方法の場合には，選抜区分を超えて同一の受験者を特定することは煩雑な作業を伴う問題が避けられない。

本研究は，以上の 2 点のうち，最初の（1）に関連する「大学独自の CEFR 対照表の更新」に主に関係している。更新作業のもとになるデータについては，本学の受験生のデータが基礎データとなるため，規模としては数万人ではなく数千人，数百人，あるいは数十人の集団を対象とした分析にならざるを得ない。

一方，英語資格・検定試験を活用する受験者が，どのような選抜区分（一般選抜，総合型選抜，学校推薦型選抜等）に出願しているのか，また出願者の地域属性を把握することは，分析対象となるデータの背景を理解する上でもとても重要な情報源であり，この点の分析結果も以下に述べたい。

なお，本研究では「みなし満点方式」申請者の大学入学共通テスト（及び大学入試センター試験）と個別試験の「英語」の得点との関係を分析対象としたが，CEFR 対照表の更新を判断するには，この分析のみでは不十分である。今後，CSE スコアと大学入学共通テスト（及び大学入試センター試験）との相関，申請者と非申請者との得点分布の違い，4 技能それぞれに関する分析等を行う必要があり，これらの分析結果については別稿で報告したい。

2 みなし満点方式の実施状況

2.1 広島大学における「みなし満点方式」

広島大学では，現在（2023 年度），大学入学共通テストを利用する選抜区分として，一般選抜（前期日程，後期日程），広島大学光り輝き入試（総合型選抜（Ⅱ型），学校推薦型選抜）がある。これらすべての大学入学共通テストを利用する選抜方式において，「英語が得意な受験生のための希望者優遇制度として，一般選抜，総合型選抜，学校推薦型選抜の共通試験を課す全学部の全募集単位で活用されている。出願時に，CEFR 相当レベル B2 以上を証明する書類等の提出によって，共通試験・外国語（英語）の得点に関わらず，満点を保証する制度設計となっている。このみなし満点方式の特徴として，「加点する方法」，「合否判定の際に評価する方法」と同様に，出願要件とはしていない点があげられる。あくまで，英語が得意な受験生のための希望者優遇制度である」（竹内・永田，2021: 332）。

2.2 選抜区分別の申請者数

表 1 は，みなし満点方式を開始した 2019 年度入試以降 5 か年における選抜区分別の「みなし満点方針」申請者数の推移である。すなわち，本学が規定している英語資格・検定試験の一定の基準を満たしたもので大学入学共通テスト（大学入試センター試験）を満点とみなされた出願者数である。なお，複数の選抜区分に出願可能であることから，同一人物が複数にみなし満点を申請する場合もある。ここではそのような同一人物による申請は区別せず，申請があればカウントした延べ数を示している。

表からわかるように，志願者全体では 5% 程度であったのが，4 年後の 2023 年度入試では 14% まで拡大した。結果として出願者数に占める割合を高い順で示せば，2023 年度入試においては「総合･推薦」＞「後期日程」＞「前期日程」となっている。

一方，第 1 節で述べた「大学入試英語成績提供システム」を実施する予定であった 2020 年度においては，その年度に高校 3 年生，受験生となる大学入試受験予定者は，その前年である 2019 年 11 月の大臣による中止発言の前までは国公立大学志願者のほぼ全員がこの英語資格・検定試験を受験，あるいは予定していたはずであり，それ以前に比べて格段に英語資格・検定試験の受験者数は増加しているはずで，そう考えると本学の場合にも 2020 年度に実施した 2021 年度入試から急激にみなし満点方式への申請者数が増加しても不思議ではないと考えられる。その一方，2020 年度以降は COVID19 によるコロナ禍となり，英語資格・検定試験が一部中止となったり，あるいは自宅での受験を可能とする実施団体も発生していることから，世界的にも混乱した状況となっていたことには留意する必要がある。コロナ禍にもかかわらず，本学のみなし満点方式への申請者が増加傾向であった理由については，私立大学等多くの大学において英語資格・検定試験を活用する（特に CEFR B2 レベル）入試が増えたことも要因の一つである可能性もある等，他にも様々な影響が考えられる。

表 1 選抜区分別の申請者数（延べ人数）

入試年度	合計	前期日程	後期日程	総合・推薦
2019	398（4.9%）	202（4.2%）	167（6.9%）	29（7.0%）
2020	448（6.0%）	244（6.9%）	179（8.0%）	25（3.0%）
2021	762（11.2%）	383（9.2%）	329（16.8%）	50（13.3%）
2022	1,063（14.6%）	532（10.7%）	467（16.5%）	64（16.0%）
2023	975（14.0%）	522（12.5%）	393（16.4%）	60（21.1%）

注）（　）内のパーセンテージは選抜ごとの該当する出願者数全体（みなし満点非申請者を含む）に対する割合。

表 2 英語資格・検定試験別の申請者数（延べ人数）。列見出しは入試年度を示す。

	2019	2020	2021	2022	2023
英検	387	426	722	1038	955
IELTS	2	11	27	10	11
TOEIC	2	2	0	0	0
TOEFL	5	5	5	6	6
GTEC CBT	1	1	2	1	0
Cambridge	0	0	0	1	3

注）Cambridge : ケンブリッジ英語検定

また，表 2 には，英語資格・検定試験の種類別の申請者数をまとめている。これをみると，圧倒的に英検（実用英語技能検定）の割合が高い。次に多いのは IELTS である。TOEIC はそれほど多くはない。

2.3 地域別申請者数

表 3 には，みなし満点方式を申請した志願者の高校所在地による地域別の申請者数と志願者数（すべての選抜区分の合計）に対する割合をまとめている。広島県は開始年度当初から全体に占める割合は高く，直近の 2023 年度入試でも 400 名近くを数えている。

表 1 でも示しているが，志願者数全体に占めるみなし満点申請者数の割合は，全体で 14%（2023 年度入試）となっている。一方，地域別で見た場合，もともと志

表3 地域別の申請者数（延べ人数）と志願者数（すべての選抜区分の合計）に対する割合。列見出しは入試年度を示す。下線は割合が10%以上の数値。

地域	2019	2020	2021	2022	2023
北海道	3(4%)	5(7%)	5(5%)	8(9%)	14(15%)
東北	1(3%)	2(5%)	2(7%)	4(8%)	4(9%)
甲信越	2(3%)	5(6%)	4(6%)	13(18%)	9(12%)
関東	17(4%)	27(7%)	54(14%)	78(17%)	80(19%)
東海	18(3%)	19(3%)	55(10%)	59(9%)	54(10%)
北陸	4(3%)	3(3%)	6(4%)	7(6%)	15(11%)
近畿	41(3%)	65(5%)	79(8%)	115(10%)	108(9%)
中国	39(5%)	44(6%)	62(10%)	95(13%)	98(12%)
広島	160(7%)	155(8%)	301(14%)	411(19%)	390(18%)
四国	37(5%)	24(4%)	65(13%)	79(12%)	68(11%)
九州・沖縄	75(4%)	92(6%)	122(10%)	191(14%)	133(11%)
その他	1(2%)	7(9%)	7(7%)	3(3%)	2(3%)

注）その他：国外等を含む。中国：広島県を除く中国地方

表4 地域別の志願者数（すべての選抜区分の合計）。列見出しは入試年度を示す。

地域	2019	2020	2021	2022	2023
北海道	67	76	95	93	94
東北	33	41	28	53	46
甲信越	69	85	67	73	76
関東	473	406	398	447	418
東海	607	560	550	645	561
北陸	123	117	134	121	132
近畿	1278	1292	1017	1183	1170
中国	789	713	613	712	812
広島	2232	2023	2096	2199	2177
四国	688	617	519	638	599
九州・沖縄	1677	1442	1227	1381	1262
その他	57	74	95	87	71

注）その他：国外等を含む。

願者数の多い地域ほど，申請数も多いと想定されるが，2023年度入試でいえば，志願者数の多い順序は，

「広島」＞「九州・沖縄」＞「近畿」＞
「中国（広島除く）」＞「四国」＞「東海」＞
「関東」＞「北陸」＞「北海道」＞「甲信越」＞
「東北」

となっている。この順序と表3を見比べると，ほぼ違いはないが，「関東」がみなし満点申請者数を見た場合に全体の出願者数における順位（7位）にくらべるとやや多めに申請しているようである（申請者の順位では5位）。

3 共通テスト「英語」と個別試験「英語」の関係

この節では本学が規定しているみなし満点方式の基準に関する検証結果について検討を行うこととする。

検証すべき観点としては以下が挙げられる：

（1） 満点とする基準は妥当か
（2） 英語資格・検定試験間の対応関係は妥当か
（3） 新しく開発された英語資格・検定試験を対照表に加えるべきか

このうち今回は，「(1) 満点とする基準は妥当か」に関して，2021年度入試から開始された大学入学共通テストの得点分布が，それ以前の大学入試センター試験のものと何か違いがあるのかどうか，といった点について考察を行ってみたい。これは，もし大学入学共通テストの難易度がそれ以前の大学入試センター試験から変化しているのであれば，当然その満点とする基準も変更せざるを得ない，と考えられるからである。一方，英語コミュニケーション志向が高く4技能をバランスよく学習する受験生へのインセンティブと捉える観点にたてば，難易度の変動には関係なく満点とする方針も成り立つ。本学における制度導入においては，この両者の観点を踏まえて導入した経緯がある。後者に関する議論は別稿において分析を行う予定であるが，本論文では，まず基準に関する分析を行うこととする。

ところでこのような検討を行うためには，基準となる指標が必要であるが，実際にそのような基準となる指標を探すのは極めて困難である。そこで試案として，(1)「英語」（個別試験），(2) 英検CSEスコア，の2つを基準として利用できないか検討を行いたいと考えている。今回はこのうち，(1) について報告する。

表5～7においては，みなし満点申請者のうち，一般選抜前期日程の「英語（個別試験）」受験者を抽出し，その得点を用いて各統計値を算出している。（表5に人数，各年度における試験の種類を示す）。

この算出過程において，大学入試センター試験と大学入学共通テストの得点におけるリーディングとリスニングの比率は，大学入試センター試験ではリーディング200点とリスニング50点の各素点の合計250点を0.8倍した得点を用いている。大学入学共通テストの場合には，リーディング100点，リスニング100点の素点をそのまま合計している。

表 5 みなし満点申請者における「英語（セ試 / 共テ）」と「英語（個別試験）」との関係

	試験の種類	N（サンプルサイズ）	r（相関係数）
2019	セ試	183	0.463
2020	セ試	219	0.433
2021	共テ	324	0.442
2022	共テ	471	0.426
2023	共テ	459	0.449

注）セ試：大学入試センター試験，共テ：大学入学共通テスト

表 6 みなし満点申請者における「英語（セ試 / 共テ）」と「英語（個別試験）」との関係（μ：平均値，σ：標準偏差）

	μ（セ試 / 共テ）	σ（セ試 / 共テ）	μ（個別試験）	σ（個別試験）
2019	172.4	14.1	127.5	20.0
2020	167.0	15.8	132.4	16.8
2021	156.8	19.6	96.6	22.5
2022	163.7	18.4	124.7	24.2
2023	160.6	18.4	135.5	22.5

表 7 みなし満点申請者における「英語（セ試 / 共テ）」の得点が 140 点以下，160 点以下の割合

	セ試 / 共テが 140 点以下	セ試 / 共テが 160 点以下
2019	3.8%	16.4%
2020	5.0%	26.0%
2021	17.6%	52.2%
2022	10.2%	38.0%
2023	11.3%	44.2%

表 5 には相関係数，表 6 には各年度別の平均点，標準偏差，表 7 には大学入学共通テスト（または大学入試センター試験）において，当初のみなし満点の想定からは低い得点である 140 点以下の得点者の割合，160 点以下の得点者の割合を示している。

まず表 5 から，相関係数においては，大学入試センターから大学入学共通テストへ移行した場合において，大きな変動は示されていないと考えられる。

次に表 6 から，平均値は大学入試センター試験の場合よりも，大学入学共通テストの方が低い傾向にある。

表 7 から，大学入試センター試験の場合と大学入学共通テストの場合では，やや違いがあるように思われる。特に，得点が 160 点以下の割合では，大学入学共通テストへ移行した 2021 年度以降はそれ以前の値に比べて約 2 倍になっている場合もみられる。もちろん，難易度（その結果としての受験者全体の平均点）は例年変化することから，すぐに結論を導くことは難しいが，一定の違いがあると推測されることから，より詳細な分析を今後進めたい。

なお，図 1 及び図 2 には，「英語（セ試 / 共テ）」と「英語（個別試験）」の実際の得点分布を散布図でプロットしている。表 5 ～ 7 において数値で示したセ試と共テとの分布の違いを図で表したものである。表 5 で示したほぼ同一の相関係数の値であることが，これらの図からも確認できる。

また，永田・三好（2023）で懸念されたこととして，みなし満点申請者のうち，一部の受験者は，大学入学共通テスト（または大学入試センター試験）の得点はすでに満点であることが確定していることから，自身の実力を意図的に 100% 発揮していないのではないか，という点があった。しかし，これらの図からは，大学入学共通テスト（または大学入試センター試験）の得点が低ければ，みなし満点申請者においても，二次試験の得点は低い傾向にあることが示されている。4 技能全体で英検準一級に必要なスコアを取得すれば CEFR B2 であることが認められることから，リーディングやリスニングの得点が低くとも，ライティング，スピーキングが高ければ準一級に合格することが可能である。本学としてどのような英語運用能力を求めるのか，といった，まさにアドミッションポリシーに直接関連する課題が存在するのではないか，と考えている。

4 まとめ

英語資格・検定試験の大学入試における活用は多種多様な方法が考えられる。信頼性の高い入学者選抜制度の構築には，不断の検証が必須である。今回はみなし満点方式の妥当性に関する部分的な検討を行った。

地域別でみれば，もともと志願者が多い地域からのみなし満点方式の活用者が多く，強い偏りがあるとは考えにくい一方，制度の周知をより広範囲で行うことが必要とも考えられる。

現時点のみなし満点における満点の基準については，大学入学共通テストと大学入試センター試験とで，やや異なる値であることが分析結果から示された。今後は，この違いと英語資格・検定試験の種類との関係に関する検証，さらに，英検 CSE スコアのような他の基準となる指標を用いた検証を行う必要がある。

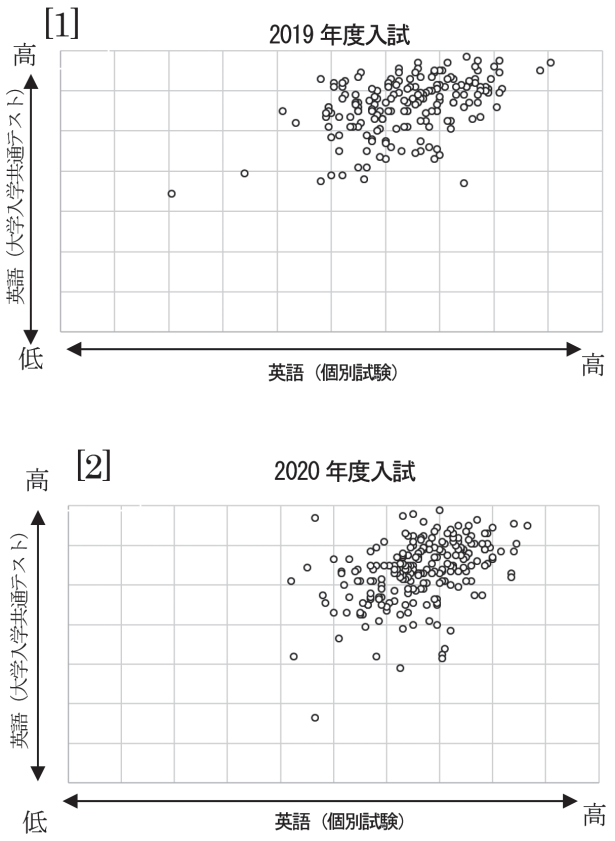

図 1 みなし満点申請者における「英語（個別試験）」と「英語（大学入試センター試験）」との関係（[1] 2019 年度入試の結果，[2] 2020 年度入試の結果）

ところで，大学入試センター試験及び大学入学共通テストでは主にはリーディングとリスニングの力を評価し，二次試験ではリーディングとライティングを評価している。4 技能をバランスよく鍛錬してきた高校生に対し，スピーキング力を個別の大学で測る（試験を実施する）か否かについての議論も必要である。スピーキング試験実施からその評価には非常にコストがかかり，特に大人数の試験では極めて困難である。まとめの最後に，スピーキング力の入試での測定について付言する。

高等学校の英語の授業で，例えばプレゼンテーションを全員に課し、ルーブリックで評価するといったことは比較的よく行われているだろう。こうした課題は入念な準備の上，特別な日に行われたスピーキング活動への評価となる。他方で，日常的なスピーキング能力の測定は行われていない，あるいは行うことは困難である。時間数，カリキュラム（シラバス）の制約が強いからである。生徒にとってスピーキングをテストする，ということが習慣化されておらず，GTEC や英検や TOEFL/IELTS といった民間外部検定試験のテストにある「一つの科目」のような認識となっていることが推察される。

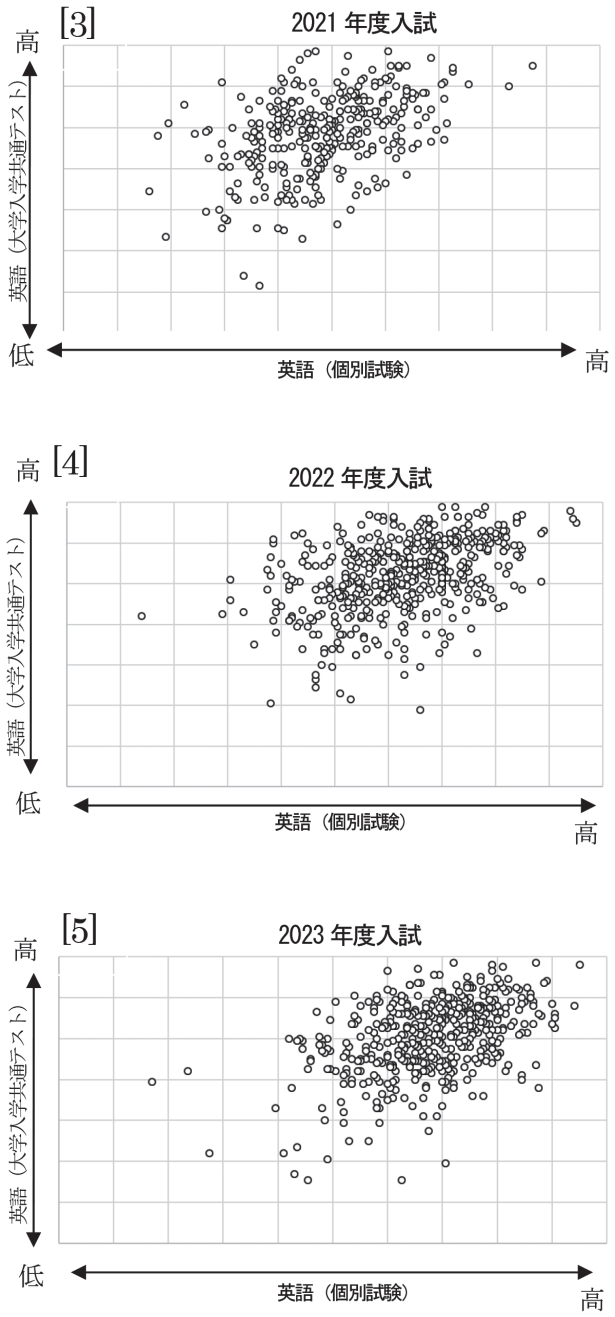

図 2 みなし満点申請者における「英語（個別試験）」と「英語（大学入学共通テスト）」との関係（[3] 2021 年度入試の結果，[4]2022 年度入試の結果，[5] 2023 年度入試の結果）

大学ではどのようなスピーキング能力が求められるか，例えば英語圏の EAP（English for Academic Purposes）に関するウェブサイト Gillett（n.d.）によれば，大学で用いるスピーキング技能習得の中心は①プレゼンテーション，②ディスカッションが円滑に進むための能力を身に付ける・高めることにあると言わ

れている。つまり，学部や分野に関係なく，大学の学術的な活動の中で共通して求められるスピーキング能力育成が求められていると言える。高校英語のカリキュラムが必ずしも EAP を意識した英語に特化している訳では無く，結果的に高大のスピーキング能力の橋渡しが難しい状況である。別の見方をすれば，大学側が EAP の視点から「入学後に必要となる学術的な英語」について基準を設定し，入学段階でどこまでの能力を期待するのか・測定しておきたいかという点を明確にしておくことが求められていると言えよう。よって，今後の課題として，スピーキング力を含めて個々の技能に関する分析を別稿にて示したいと考えている。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 22K02684 の助成を受けたものです。

参考文献

中央教育審議会（2014）.『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ, 未来に花開かせるために～（答申）』2014 年 12 月 22 日，15 － 16
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf（2022 年 3 月 25 日）.

大学入試のあり方に関する検討会議（2021）.『大学入試のあり方に関する検討会議　提言』，2021 年 7 月 8 日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/toushin/mext_00862.html（2022 年 3 月 25 日）.

Gillett, Andy（n.d.）What is EAP?
http://www.uefap.com/articles/eap.htm（2023 年 12 月 11 日）.

教育再生実行会議（2013）.『これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）』，2013 年 5 月 28 日
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf（2022 年 3 月 25 日）.

文部科学省（2001），『英語指導方法等改善の推進に関する懇談会（報告）』，平成 13 年 1 月 17 日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/010110.htm（2022 年 3 月 25 日）.

文部科学省（2016）.『高大接続改革の進捗状況について，平成 28 年 8 月 31 日
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/08/1376777.htm（2022 年 3 月 25 日）.

永田純一・三好登（2023）.「共通テストの英語における英語民間試験導入の効果と課題（２）－広島大学におけるみなし満点方式を申請した志願者分析より－」『大学入試研究ジャーナル』**30**，234―238.

竹内正興（2018）.「共通テストへの英語民間試験導入が受験生に与えた影響―B 大学の事例からの検討―」『大学入試研究ジャーナル』28，187―192.

竹内正興・永田純一（2021）.「センター試験の英語における英語民間試験導入の効果と課題－広島大学におけるみなし満点方式を申請した志願者分析より－」『大学入試研究ジャーナル』**31**，332 － 337.